フィールド（現場）からの風 515

宮田守男

外来種がはびこる 自然だけは防ぎたいものだ

梅池自然園の秋の紅葉便りが届き、「山粧う」と言われる時期になったが、収穫の終わらない稲田の風景が気になる。松尾芭蕉の句に「物言えば唇寒し秋の風」ではないが、刈り取り作業に悩む農家からは「物言えば唇寒し」との気持ちが伝わって来そうだ。

今頃の季節になるとセイタカアワダチソウの黄色い花が荒廃地を一面に埋めた風景を思い出し、駆除作業に取り組んだ想い出がある。この外来種は根から出す科学物質でススキなどの在来種の発育を妨害するため、その侵略性が問題視された。それが今や昔のような勢いを失い、ススキも駆逐されなかった。土中に残留する、その科学物質はセイタカアワダチソウ自体の発育も妨害する作用だと毎日新聞コラム余禄さんが紹介した。これらの研究が進み、外来種がはびこる自然だけは防ぎたいものだ。

エリザベス女王の国葬は世界から注目され、多くの情報が発信された。女王のひつぎが夫のフィリップ殿下の眠るウィンザー城の礼拝堂の一角に埋葬された。参列したキャサリン皇太子妃をはじめ皇室の皆さんが日本製の真珠を着用していた。

作家でジュエリー史の研究家ヴィヴィアン・ベッカーさんは「真珠を着用するのは、英国の伝統。色を抑える意図で、真珠は、キラキラせず、強すぎない。目立ちすぎずに、敬意を表現できる」との意図を情報発信した。今後海外のお客さまが日本に訪れる際には、これまで以上に日本真珠への購買意欲が高まるのかと期待してしまう。

またロンドン近郊ウィンザー城で女王の葬列の到着を待っていた2匹のウェルシュ・コーギー・ペンブロークが葬列をじっと待っている姿が感動的だった。我家でも十年以上コーギーを飼育している。愛らしい姿だが、やんちゃなところもあり、しつけが存外難しい犬で、女王の犬はどんなしつけがされているのだろうか気になってしまった。

女王とコーギーとの付き合いは長く、最初に飼ったのは7歳のときだそうだ。生涯で飼ったコーギーは30匹以上。最後の飼い犬となった「ミック」・「サンデイ」は女王の次男アンドルー王子と元妻に引き取られることになったとの事。コーギーの飼い主としてコーギーに関心が高まり、またのコーギーブームにならないかと期待してしまう。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

花の少なくなった時期に住宅の一角に咲く「秋明菊」キク科ではなくキンポウゲ科の植物だ